虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です。

Rainbow Bridge♪ 虹の架橋

第３３３号
令和５年５月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

今月の題字
深津素子さん
（桐生市出身）

声楽家の深津素子さんは6月の「虹の架橋感謝の集い」に出演する混声合唱団「コールシャンテ」の指導者でもあり、「虹の架橋」の読者としても長いお付き合いを頂いています。

虹の架橋三百号感謝の集い
五月一日から無料整理券発行

多くの人たちとの間に『心の虹』を繋ぎたいという思いで、平成七年九月に創刊した「虹の架橋」は令和二年八月に三百号を迎えました。「虹の架橋」の発行を創刊当初から支えてくれた親しい仲間が実行委員会を作り「虹の架橋三百号記念感謝の集い」を計画してくれました。新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催が大幅に遅れてしまいましたが六月四日午後二時から、ながめ余興場で開催することが決まりました。

感謝の集いの第一部は、ネパールの寒村で支援活動を続けているＯＫバジこと垣見一雅さんがネパールでの活動の様子をご紹介します。

第二部は、記念コンサートとして、地元で音楽活動をしているエンジェルベル、コール萌、コールシャンテの皆さんが「星野富弘さんの世界から」というテーマでハンドベルや富弘さんの詩に曲をつけたコーラスを披露します。

入場は無料ですが整理券が必要となります。整理券は足利屋とアスクで五月一日から発行いたします。

イベント協賛スポンサー募集中！

今回のイベントはＯＫバジを支援するチャリティイベントも兼ねて、協賛スポンサーを募集しています。一口五千円以上を協賛していただいた方には当日配布するプログラムに広告を掲載し、星野富弘さんに書いていただいた『虹』の刺繍入りハンカチをプレゼント致します。

世界一小さな足利屋トイレ美術館

今月の絵《333》
古美門佳一郎さん『燧坂』

毎年、新緑の季節になると、古美門佳一郎（こみかど・けいいちろう）さんからいただいた『燧（ひうち）坂』の絵を飾っています。古美門さんのお話によると、燧坂は銅（あかがね）街道のルートのひとつで下神梅から桐原に至る峠で、日光坂とも呼ばれていたそうです。今もこの道には「南無阿弥陀仏」と彫られた岩があり、江戸時代に馬の背中に銅を載せて峠を越えた人たちの苦労が偲ばれます。

五月の足利屋の休憩コーナーでは『燧坂』の他、「小田代ヶ原の貴婦人」など、古美門さんの油絵作品を数点展示いたします。

小耳にはさんだいい話
（文責・靖）《333》

伝えたかった「ありがとう」

虹の架橋を十数年前から毎月読んでくれている大阪在住の詩人・里みちこさんから私の誕生日に心のこもったお手紙をいただきました。その中に『優便ポスト』という案内チラシが入っていました。

郵便ではなく、優便と書く「優便ポスト」は旧赤名村（現飯南町）出身の里みちこさんが提唱し、二〇一六年十一月二十三日（いいふみの日）に創設されました。

「あの人に伝えたかったけれども伝えられなかった『ありがとう』や『ごめんなさい』、そんな心のうちをつづったお手紙や気持ちを『優便ポスト』が受け付け、お預かりした「優便」は開封することなく毎年一月、谷地区のとんど焼きにて一条の煙となり天高く空にお届けします」と書かれていました。地元の人たちが心を込めて作った木製の優便ポストには、里みちこさんの自筆の「ありがとう」と「ごめんなさい」の詩が添えられています。

「ありがとう」と「ごめんなさい」

目でいえる
口でいえる
手でいえる
合掌でいえる
体でいえる
心でいえる
ふたつの言葉
ありがとうと
ごめんなさい
どちらかひとつを
選ぶとしたら
それはやっぱり
ありがとう
最期のことばは
ありがとう

ちょうど誕生日の日に届いた里みちこさんからの手紙で「優便ポスト」のことを知り、私を産んで三時間後に亡くなった母に初めて手紙を書きました。「おかあさんへ」と書き出して涙が止まらなくなりました。手紙を書くことも、もらうことも好きな私ですが母に手紙を書いたのは初めてでした。そして、最後の言葉はやっぱり「ありがとう」でした。

心の忘れ物を受けとめてくれる優しいポストに大切な人への手紙を託してみませんか。

送り先は、〒690-3514 島根県飯石郡飯南町井戸谷393-1 谷笑楽校内優便ポスト

靖ちゃん日記

令和五年四月九日（日）

千葉県君津市で開催中の「星野富弘花の詩画展」の最終日。富弘美術館の聖生（せいりゅう）館長が記念講演をするので同行した。七時半に二人で大間々を出発。アクアラインの「海ほたる」で休憩して三時間半で君津に到着。会場は廃校となった旧竜山中学校。築二十年の校舎は地元木材を使った立派な造りだったが市内から遠く離れた山間部。人が集まらないのでは、と心配したが九月間で二千人以上が来場したという。スタッフの人たちの熱意と行動力に驚いた。富弘美術館を囲む会千葉県支部長の渡辺護さんは群馬大学の体操部出身で富弘さんとは五十年以上の親友。富弘さんは、人望の厚い渡辺さんを評して、貧乏暇なし、ではなく、「人望暇なし」と言っていた。

足利屋が販売元の富弘さんのハンカチも会場で売れていた。今年、製造原価は上がったが値段も音(税)も上げないことにした。「益はなくとも意味はある」、「辛抱暇なし」？

四代の老舗の風や楠若葉

大間々駅前停車場通りに「松﨑足袋店」の看板を掲げた足利屋は今年創業百十年を迎えます。大家さんだった野口材木店の「貸家口取簿」には、大正二年五月から月五円五十銭の家賃を支払っていた記録が残っています。

本家の花輪・足利屋に生まれた松﨑友次は二十二歳の時、開業したばかりの大間々駅前で足袋屋を始めました。現在の場所に移転したのは昭和十八年のことでした。

足利屋の屋敷稲荷のご神木でもある楠は初夏に古い葉が落ちて若葉に代わります。足利屋でも四代目となる若葉が成長しています。

虹の架橋 ⇑ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百三十四号は令和五年六月一日（木）発行予定です。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん